

ベトナム中部カトゥー族農村における生業の実態と構造分析

時任 美乃理

キーワード： ベトナム社会主義共和国, 少数民族, カトゥー族, 生業, 土地利用,
アカシア林業, モノカルチャー

1. 背景および目的

ベトナム社会主義共和国の農村部では、ベトナム戦争後大規模に行われた少数民族の定住化政策や森林分配事業によって土地利用形態が大きく変容してきた。中部山岳地帯で多数居住する少数民族・カトゥー族は、かつては焼畑耕作民であったが、現在では林業に従事する者が多く、特にアカシアプランテーションを広範囲に実施している。各種政策実施後、数十年が経ち、新たな森林資源の利用形態が確立された状況となったが、少数民族がどのように土地を利用し生活を営んでいるのか、その傾向と問題点を精査した研究は未だみられない。そこで本研究ではカトゥー族の居住する集落を対象として世帯単位での悉皆調査を行い、主に土地利用に基づく世帯別の生業をミクロな視点で分析することで、その実態と構造を明らかにすることを目的とした。

2. 調査および分析の方法

対象地はベトナム中部山岳地帯に位置するトゥアティエン=フエ省ナムドン県トゥンロー社ドイ集落とし、2014年6月と同年9月～10月の2期間において、集落全世帯（157世帯）を対象とした半構造化インタビューと参与観察を行った。収集したデータを、主成分分析およびクラスター分析により解析した。集落の主要生産物4項目（アカシア、ゴム、水稲、キャッサバ）の世帯別耕作地面積を説明変数としたクラスター分析を分析①（主要生産物クラスター分析）、果物、野菜等を栽培目的別（自家消費目的、販売目的、自家消費または販売目的）に分類して説明変数としたクラスター分析を分析②（主要生産物およびホームガーデン作物クラスター分析）とし、それぞれ主成分分析によって土地利用の特性を解釈した後、主成分得点を用いたクラスター分析を行い、土地利用状況に基づき各世帯を類型化した。

3. 結果および考察

分析①の結果、ドイ集落の世帯は、「アカシア林業に特化した土地利用を持つ世帯」と、「バランスの良い土地利用を持つ世帯」の2つに分類され、さらにカテゴリー数を増やした分析を通じて、前者の中でも、より依存度が高い世帯が抽出された。また、分析②の結果、「自家消費作物栽培型」「販売作物栽培型」「土地無し型」の3つに分類された。得られたそれぞれのクラスターの世帯について、「土地所有状況」と「土地利用をともなわない生業」の従事世帯数を検証した。「アカシア林業に特化した土地利用を持つ世帯」は、台風や暴風雨などの自然災害により、アカシア林が被害を受けた場合収入への影響を直接的に受けってしまうリスクを抱えた「土地依存世帯」と、収入への影響を間接的に受けってしまうリスクを抱えた「非農業職依存世帯」の2集団に分けることが出来た。また、深刻な土地不足と集落外での雇用機会の欠如によって多くの世帯は販売作物栽培に依存しており、救荒作物を持たない「リスク世帯」の割合は全世帯数の95%となった。これによりドイ集落における脆弱な生業構造が示唆されたが、一方で、アカシア林業に特化しつつも同時に救荒作物を栽培する複合農業により、脆弱な生業構造の潜在リスクを回避していると評価できる世帯も一部存在することが分かった。また以上に加え、ベトナムでみられたモノカルチャー化の過去の事例と比較検討することで、対象地の土地利用構造をさらに考察し、生業の持続性に関する課題を抽出した。そうした課題を踏まえ、脆弱な生業構造を改善するためには、FLAをはじめとする森林政策の再検討、モノカルチャー化が持つ潜在的リスクの周知、周到な土地利用計画の実施が必要であると考えられる。